

若いお母さんたちへ

我が子らの夜泣きや 母離れをめぐるって

小 蘭 江 幸 子

我が家の三人の子ども達も、この四月で、それぞれの生活の節目を迎えることになった。六歳の祐子は小学校に入学、三歳の章博は、幼稚園の年小組に、一歳七か月になる匡博は週に三時間ほど、近所の乳児院で過ごさせてもらうことになった。その間、私は保健所の四か月健診の心理相談のお手伝いをさせていただいている。末っ子の匡博は、今まで、母親と離れて過ごす時間ということが全く無かったので、どのようにして、乳児院での半日を受け入れるようになるのか、見届けるのが楽しみでもあり、不安でもある。

匡博は、今までは、ごくたまに私のよんどころのない外出のために、父、姉、兄とともに留守番をする時には、私を追いかけて、数分間泣き続けていたそう。しかし、ごく最近になって、父親と姉兄達が買物や公園に出かける仕度を始めると、自分の靴を両手に持って追いかけるようになった。そんな時には、母親を家に残して自分が外出する事は、簡単

にできるようだ。一歳半を過ぎたのに、断乳がまだできていないことが、母親と離れがなくなっている要因だと父親は主張する。確かに、夜間に、たいへん頻繁に泣くので、私の体力のこともあり、断乳できずにいる。乳首を口に含ませてやることで、安心して眠りにつく匡博のようすを見ていると、この安心感を与えるための授乳を、どうしてもやめる気持ちになれない。暖かい季節になって匡博の眠りが深くなり、昼間の外遊びもふえて夜間ぐっすり眠るようになるまで待ちたいと思っている。

第二子の章博のほうは、むしろ、人見知りのほとんど出ない子どもだった。五か月と七か月の時に一度ずつ、来客の顔を見て泣き、月に何度か、保育園で過ごす時にもはじめの数回、私を追い求めて泣いたけれども、保育園での楽しみに気持ちが移っていくのも早い子どもだった。生後すぐから、章博は、夜の眠りにつく時を、父親の手に委ねてきた。それは、姉になったばかりの祐子が眠りにつく時間だけ

は、母親を独占させて気持ちを満たしていこうとしたためである。章博にとって、たとえ父親であっても、世話をし、安心感を与えてくれる人がついていけるならば、それほど問題になることはないだろうと、夫と私の間では話しあっていた。

また、章博は、もの心つく頃から、好奇心をあらわにする性質で、何にでも興味を示していた。未知の物、事柄に対して、あまり不安感を持たないで関わっていく。祐子の幼稚園の通園に、章博も一緒についていったのであるが、好きな固定遊具や動物が目にはいると、私の方はふり向きもせずに遊びに行ってしまう、母親の存在など忘れてしまっているように感じられることがあった。私の方は章博を、捜し回っているわけで、いわゆる迷子という状態である。やっとみつけ出した時にも、私を捜し求めて泣いているということはほとんどなく、割合に平気な様子であることが多かった。いわゆる人見知り反応が少なかったこともあり、母子間の心のつな

かりが弱いのではないかと、心配にもなった。けれども、今、考えてみると、三人の兄弟の中でも、私との心のつながりは、強いほうではないかと思える。そして、最近になってやっと、自分から、母親を捜し出して、帰って来るようになった。玄関のかぎをはずして、外に出、自宅の周辺で気に入ったあそびをした後、必ずもどって来るという安心感も持てるようになった。

実は、この章博も、一歳をだいぶ過ぎても夜泣きの激しい子どもで、夜中に一、二時間ごとに泣き、乳を含ませることで夜泣きをおさめてきたので、やはり断乳は遅くなってしまった。一歳三か月の時に、春を迎えて、暖かくなったおかげで眠りも深くなり、やっと、断乳もできたのだった。章博は、ほとんど、不安がる様子もなく何でもやってしまう、どこにでも母から離れて行ってしまいう子どもにみえたが、ことはや態度で表現しようのない、不安やいらだちがあったのかもしれない。それが夜泣きとい

う形であらわれていたのではないかと思うのは考えすぎだろうか。

初めての幼稚園生活にとびこんで、章博は、お友達への興味や関心の表現のしかたがわからずに、追いかけまわしたり、ちょっかいは出してさわぎをひきおこすこともあるようだ。がしかし、おそらく、すぐに先生を大好きになるだろうし、仲良しになるきっかけをつかめれば、心のつながるお友だちが増えていくのではないかと、楽しみでもある。

さて、第一子の祐子であるが、彼女は、お座りができるようになって、両手が自由になり出した頃から、ひとり遊びをよくする子どもで、私が、十分間位、二階にあがって干し物をしてきても、気嫌よくおもちゃをなめまわしているような子どもだった。だから、隣家の祐子の祖母のところへ、私が用事をしに行ってもひとりで遊んでいられるように見えた。夜泣きもなく、十か月ですんなりと断乳に成功している。しかし、一歳二か月でひとり歩きができ

るようになった頃から、どこまでも私を追いかけて来るようになった。祐子の二歳すぎの時に、私が章博を妊り、入院のための数日間の不在には、父親、祖母とすごした。入院の意味や、日教などを、祐子にもよくわかるように話してみたが、私の不在の間、父親たちをそれほど手こずらせるでもなく、すごせたようだ。しかし、その後今日に至るまで、ひとり留守番など、絶対にできない、死ぬほどいやだと、拒否しつづけている。それでも母親のかわりに、父親がいたり、幼稚園生活では、担任の先生が、すぐに母親にかわる存在となったので、何の支障もなくすごし、卒園した。

最近、ひとり、近所の商店街まで買い物に出かけるようになった。「お母さんついて来ないで」と念を押し、肩で風を切るようにして出かけていく、そして、また、私に、ピアノの練習に誘われるのを避けるようにして、私の目の届かない所に人形一式を運びこみ、時には章博も誘って、二階での

ごっこ遊びに興じている。「お母さん、買物に行ってきたいいよ」と、祐子が留守番を引きうけてくれるのも時間の問題ではないかと、今からとても楽しみにしている。

ところで、毎週日曜日、朝日新聞の家庭欄に、「おはなし、おはなし」というテーマで河合隼雄先生が、エッセイを連載しておられる。お読みなになった方も多いと思うが、二月二十一日の「魔法のまど」と題するお話は、大変に興味のひかれる内容だった。その部分を抜粋しておこうと思う。

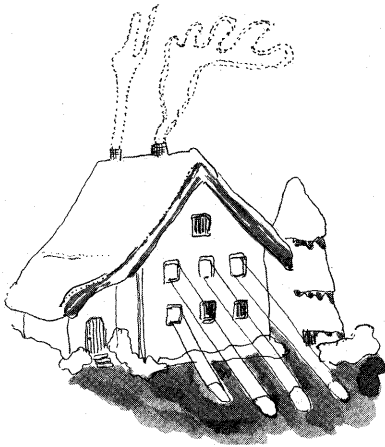
——最近亡くなられた井筒俊彦先生が次のようなことを書いておられた。われわれは通常は自と他とか、人間とぞうとか、ともかく区別することを大切にしていく。しかし、意識をずうっと深めていくと、それらの境界がだんだん弱くなり融合してゆく。そして一番底までゆけば「存在」としか呼びぶくのないような状態になる。そのような「存在」が、通常の世界には、花とか石とか、はっきりとし

たものとして顕現している。従って、われわれは「花が存在している」と言うが、ほんとうは「存在が花している」と言うべきである、というのである。

「存在が花している」という表現は、私は大好きである。そして、まどさん（詩人のまどみちおさんのこと）の詩を読んでいるとその感じが、びたっとわかるときがある。まどさんの詩に出てくる、花や石や、ぞうやのみなどに合うと、「あれ、あんた花やっってはりますの。私、河合やっってますねん」と挨拶したくなってくるような気がするのである。根っこでつながっている感じが、実感されるのである。

これを読んで、私の中に、きわめて鮮やかによみがえって来る私自身の幼児期の体験がある。おそろく、三歳か四歳位から始まって十歳位まで、消えてはあらわれたように思う。それは、美しい花とか、木の枝とか、空の雲とか、自然界のすてきな物に、心を奪われるほど見とれている時に、私の中に突然

に、おこるのだった。「私は花ではなかった」「私は雲ではなかった」「私は私という人間だったんだ。花とは違う、たったひとり人間だったんだ」という覚醒のような感覚なのである。そしてそれは、この世にただ一人という、たいへんな寂寥感、孤独感が、押しよせてくる感じで、足もとをすくわれてころんでしまわないように、足をふんばり、身を固くして、それが通りすぎるのを待つしかなかった、そ



のたびに、「私は、私だったのだから、何でも、ひとりで考えなくて、ひとりで決めなくて、どっちへ歩いていくのか自分で考えて、自分で足を動かさなくてはどうにもならないんだ」ということを、必ず、思い出させられるのである。美しい物、気に入った物と一体となって一緒に酔っていたのが、急に、分離し、独立した存在であることに気がついて、世界中から孤立してしまったような、見放されてしまったような感じを持ったということなのだろうと思う。ということ、覚醒の感覚をとりもどす前の状態というのは、見とれていた物と自己の意識は、混然となってほぼ一体化していたのではないだろうか。今になって考えると、その覚醒の感覚というものは、温かく、頼りになる存在、自分を守り包み込んでくれる存在と自分が、一体だと思っていたのに、突然、違った存在、各々独立した存在だということに気がついてしまった、というように言えるような気がする。二歳から三歳にかけて、主な養育者

が、祖母から、実母に移行したこと、何か関連があるのかもしれない。

このようにして、自分の幼い頃のことを、思い出してみたりすると、一歳と三歳の我が家の男の子達の夜泣きについても、私の体験した寂寥感とは違っているかもしれないが、ある種の感覚が伴っているのではないかと思ってみたりする。断乳を急いだりせずに、くり返される夜泣きをなだめながら、自然に泣かなくなるのを待とうと思う。章博がやっと尿意を伝えられるようになったのが、三歳直前だった。一年以上の間、汚れたパンツを洗い続けながら、母としての試練に耐えること、待つことのできる幸せも味わわせてもらった。子育てという、この重い役割を与えられている幸せを、感謝の気持ちで忘れずに全うしたいものだと思う。

(はるにれの念)